

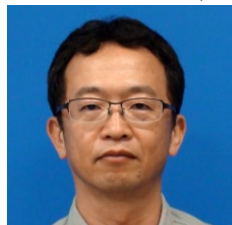
医療健康情報技術研究センター

2014年度第4回講演会

The 4th HiMED Seminar (FY2014)

2014年12月10日(水) 16:20 ~ 18:20 6号館 6224 教室

DECEMBER 10, 2014, 0420PM-0620PM@6224



Invited talk 1

Doctor Hiroaki Inui, M.D., PH.D.

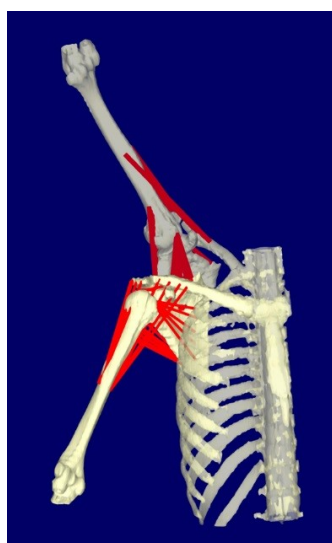
乾 浩明 博士

バイオメカニクス研究所所長

INSTITUTE OF BIOMECHANICS
NOBUHARA HOSPITAL
信原病院バイオメカニクス研究所

肩関節疾患とバイオメカニクスの応用

肩関節代表的疾患について概説し、どのように当院で行ってきた研究が病態の理解に役立つか解説します。上腕骨、肩甲骨、鎖骨の3つの骨とこれらの周囲筋や関節包から構成される肩関節は多様で複雑な機能を有します。この機能を理解するうえでどのような当院の研究が有用か述べたいと思います。バイオメカニクスを研究するうえで我々が大切にしていることは、出来る限り直観的にイメージしやすいようにすることです。さらに普段私たちが治療にあたっている腱板断裂・肩関節脱臼・動揺性肩関節症（ゆるい肩）・肩結合織炎（肩コリ）など症状・病態の捉え方についても解説します。



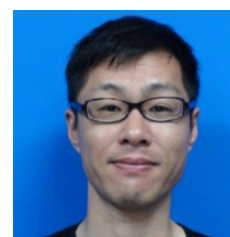
Invited talk 2

Doctor Hiroshi Tanaka, M.S.

田中 洋 氏

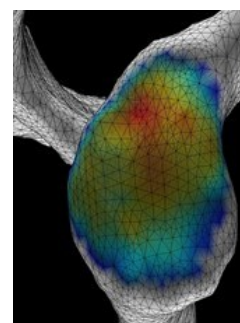
バイオメカニクス研究所主任

INSTITUTE OF BIOMECHANICS
NOBUHARA HOSPITAL
信原病院バイオメカニクス研究所



医療と工学との懸け橋を目指して

エビデンスに基づいた診断と治療が求められる現在、医療と工学の「つながり」が重要視されています。特に整形外科領域は工学との相性がよく、工学の果たす役割が極めて大きいことは、医療機器のアップ・トゥ・デートをみてもわかるかと思えます。臨床ニーズに工学的手法で応えるためには、どのような方法でそれを解決できるか、どの程度の正確性をもってそれを評価できるかといったことを具体的に提案しなければなりません。その際、一方は筋、腱、靭帯といった臨床言語を第一言語とし、一方は数式を第一言語としていますから、意思の疎通は難しいといえます。我々工学者は、臨床家と意思の疎通を図るために、臨床言語を「正しく」理解することが必要となります。また、導き出した結果を視覚的に理解しやすい形で臨床家に還元することがキーポイントであり、それに重心をおいて取り組んでおります。そうすることで、我々が得意とする「物（無形・有形）を作る」、「評価する」ことにさらなる価値が見いだされることを実感しています。本講演では、当院内での工学者の立ち位置を紹介し、臨床ニーズに応えるための計測法やシステムの構築などを経験的に御紹介させていただきます。



Language(言語) :

Japanese(日本語)

問合せ先 :

工学研究科 電気系工学専攻 小橋昌司 079-267-4989

Contact:

Syoji Kobashi, kobashi@eng.u-hyogo.ac.jp